

「彦火々出見尊絵巻」の制作目的について

東京大学 五月女晴恵

「彦火々出見尊絵巻」は、12世紀末に、後白河院の命により、宮廷絵師・常磐源二光長によって制作されたと考えられている。その原本は現存しないが、原本に忠実な模本が伝来する。

「彦火々出見尊絵巻」は、所謂「海幸山幸神話」を題材としており、彦火々出見尊（山幸彦）が、波の逆巻く荒海を渡って、日本と龍宮との間を何度も行き来する様子が描かれているが、その荒海を泳ぐ摩竭魚の表現は、「平家納経」提婆達多品の表紙に描かれたものと良く似ていることに気付く。また、同じ「平家納経」提婆達多品の見返には、海中から湧現した龍女と二人の侍女が描かれるが、その服制や髪型・持物等は、「彦火々出見尊絵巻」に描かれた龍宮の女性たちと非常に近似したものであることにも気付く。

後白河院は、承安四年<1174>に平清盛とともに巖島神社を訪れていることから、「彦火々出見尊絵巻」制作時には、既に「平家納経」提婆達多品の図様を知っていたと考えられる。従って、「彦火々出見尊絵巻」に描かれた豊玉姫には、龍女成仏説話の龍女のイメージが重ね合わせられていると推測できる。

さらには、「海幸山幸神話」は、所謂「浦嶋子伝説」と同一の源泉から生まれたものと考えられているが、それらに説かれる龍宮世界は、12世紀前半には、阿弥陀の極楽浄土と結び付けられるようになっていたことが史料から確認できる。従って、「彦火々出見尊絵巻」に描かれた龍宮の建物が、「平家納経」提婆達多品に描かれた楼閣や、金戒光明寺所蔵「地獄極楽図屏風」に表された極楽浄土の楼閣等と共通性を持つことは、決して偶然ではなく、龍宮世界を極楽浄土のイメージを兼ね備えたものとして描こうとしたことの現れだと言えるだろう。

ところで、「彦火々出見尊絵巻」の制作時期は、1170年代後半と考えられるが、注文主である後白河院は、この時期、毎年のように四天王寺に参詣していたことが確認できる。当時、四天王寺では、難波の海に面した西門が極楽浄土の東門に通じるという信仰が隆盛を極めており、また、後白河院も念仏三昧院念仏講の結衆になる程、この西門信仰に傾倒していたことが知られている。先に述べたように、12世紀前半には、龍宮世界と阿弥陀の極楽浄土とを結び付ける傾向が生じており、そのような中で、後白河院が四天王寺に再三訪れていることを考え合わせると、後白河院自身が西門において現世の海と極楽浄土との繋がりを体感したことが、「彦火々出見尊絵巻」の制作を思い立つ契機になったように思われて来る。

さらには、1170年代末には、後白河院の極楽往生への希求が高まっていたことが史料から確認できることや、「彦火々出見尊絵巻」において日本と龍宮との間を自由に行き来する彦火々出見尊とは天皇家の祖先とされる人物であること等を踏まえると、「彦火々出見尊絵巻」の制作には、後白河院自身の極楽往生への強い願いが込められていたと推測できる。